

おじさんの青春日記 くその3く

岡ちゃんに捧げる詩

うた

追悼改訂版

岡ちゃんは一滴もお酒が飲めません。それなのに、毎晩のようにどこかの酒場で「北国の春」を歌う岡ちゃんの姿を見ることができません。

くたびれた皮のトランク、よれよれのレインコートを盛り場の要所要所に隠して、接待のお客さんを前に千昌夫の扮装で「北国の春」を歌うのです。

岡ちゃんの仕事は、大型クレーンメーカーの営業マン。潮風に鍛えられて赤銅色に日焼けした世界中の海の男たちが、岡ちゃんの大切なお客さまです。

その昔、大阪のお得意先に納めたクレーンが故障して、現地に部品がなくて困っている話を聞いた岡ちゃんは、その足で上司の許可もとらず、三百キロの深夜の道のりを部品を抱えてタクシーをぶっ飛ばしました。

あとで上役にはこっぴどく叱られたそうですが、修理が済んで、機械が再び息を吹き返して動き始めた時のお客さんの笑顔を見るのは、そりゃあ、たまらなく嬉しいものだそうです。

「困ったときは会議をせず、まずお客さんのところへ行く」ことが岡ちゃんのモットーなのです。もとより、上司の顔をうかがって出世してやろうなどという気は、岡ちゃんにはこれっぽっちもありません。

とっさの判断が必要な非常の時、マニュアルにない事件の対応で皆が頭を抱えている時、真っ先に体が動くのが岡ちゃんです。

大阪の件以来、岡ちゃんの深夜の長旅のお供をしたカープタクシーの運転手さんのあいだで、岡ちゃんの心意気は大評判。

岡ちゃんを頼って世界中から訪ねてくるお客さんは、岡ちゃんが同乗するタクシーのなかの、春風のような心地よさに異国の疲れを忘れます。

タクシーを呼ぶ暗号は、カラオケの曲番からつけた「屁（へ）の五番」。

広島全域に散る百三十台ものカープタクシーが、岡ちゃんの声と「への五番」の合言葉を聞き分け、どこへでも最優先で駆けつけます。

太平洋戦争開戦の年、生まれたばかりの岡ちゃんは、翌年、お父さんを戦争で失いました。もちろん、お父さんの顔は覚えていません。

陸軍伍長としてフィリピン、台湾を転戦のち戦死したお父さんの死因、「マラリアによる肺炎」が遺族年金の受給条件に該当しないという理由だけで、厚生省は戦後も遺族年金の支給を拒否し続けたそうです。

戦争犠牲者をなおも峻別（しゅんべつ）しようとした国の冷たさを、岡ちゃんはいまも憤っています。

昭和十九年、一家はお母さんの里に疎開。当時五才だったお兄さんと、乳呑み児だった岡ちゃんを、お母さんは和裁と洋裁の内職で育てあげました。

三日間徹夜で内職のミシンを踏み続け、指先を縫い針で縫ったまま悲鳴とともに気を失ったお母さんの姿を、岡ちゃんは一生忘れないといいます。

お母さんの生命ともいうべきミシンが、質屋のノレンに消えていったこともあります。奨学金を得て高校を卒業した岡ちゃんは、念願の大企業、三菱重工広島造船所へ入社しました。

入社といっても日給制の臨時工員扱いです。体を動かしてお金をもらえる喜びを、岡ちゃんはこの時初めて体験しました。

就職したのちも夜学で製図の勉強を続けた岡ちゃんは、十三年間の工場勤めのうち、念願の機械営業部に転属になりました。三菱重工が海から陸の構造物へと、経営の重点を変えつつある時代でもありました。

工場の送別会の時に現場のみんなにはなむけに貰った、バーバリーの紺のブレザーが岡ちゃんの一生の宝物です。

阪神大地震の時ほど岡ちゃんが青くなつたことはありません。

今度はタクシーで、という訳にいきません。瀬戸内海を小舟を乗り継いで神戸港の岸壁に立つた岡ちゃんは、ことごとく倒壊したクレーンの群れを見て言葉もありませんでした。それは『わが子の屍（しかばね）を見るような思い』でした。

着のみのまま、テントに寝泊りしてクレーンの修理にあたっていた時の岡ちゃんの姿は、それはまるで幽霊のようでした。

灯りの消えた神戸の町。ボランティアの青年からもらつたおにぎりは、噛むごとに涙がこみあげてきて、手のなかでグシャグシャになりました。

倒壊した神戸の街は敗戦直後の日本の街そのままでした。貧しかった頃、家族で分けあって食べたおにぎりのことを岡ちゃんは思い出しました。

みんなが明日を生きることには精一杯の時代でした。

生涯をクレーンの仕事にかけ、世界じゅうにクレーンを売り歩いて、外貨を稼いできたという誇りが岡ちゃんにはあります。

小麦や鉄鉱石を港で積み降ろすクレーンの勇姿は、岡ちゃんの生きがいです。

名も無いタクシーの運転手たちや、蟻のように働くクレーン工場の工員たちが、自分の仕事を橋脚のように支えてくれています。

ボランティアの青年の屈託のない笑顔のなかに、昔とは比べようもなく豊かになった日本を見たようでした。自分も少しだけこの豊かさを支えてきたのだと、岡ちゃんは思いました。

来年の春、岡ちゃんは停年退職の日を迎えます。

その時は東北の故郷に帰って、思い切り「北国の春」を歌おうと、岡ちゃんは考えています。

了